

生きること

食べること

梶本 久美子

生きること

食べること

7月30日。翌日に60歳の誕生日を迎える父に、そっけなく『何か欲しいもんある？』とケータイからメールをした。すると直後に返信がきた(以下、『』はケータイでのやりとり)。
『ありがとう。今日からまた暫く入院が決まりました。2年連続病院のバースデーになりました。』

『ええ～。なんで～？』

『お腹の中がぐしゃぐしゃになっているのを綺麗にしてもらいます。痛みもきつかったしちょうどいいのです。』

突然ではあったが、ちょうど1年前にすい臓がんと診断され、8時間を越える手術をし、今までも何度か入退院を繰り返していたので、たいして驚きはしなかった。状態が悪化しているとかそういう雰囲気でもなさそうだ。何よりも、本人がメールしてきているのだから、きっと大丈夫なのだろう。ただ、“2年連続病院でのバースデー”、しかもせっかくの還暦なのに。

その日の夜、母からみなと神戸花火大会のお誘いメールが届いた。

『今度の部屋は11階の個室です。花火特等席です。ミニお誕生会しませんか？一緒に花火見るだけだけどね。』

みるみるうちに痩せていく父を見ていると、花火に限らず“これが最後かも”と思う連続だった。この時ももしかすると、これが一緒に見られる最後の花火かもしれない、という気持ちが溢れてきて止められなかった。

翌日、父の誕生日。また昼休みにメールを送った。

『お誕生日おめでとう。土曜日の花火大会は特等席をありがとう！楽しみだねえ！』

『めったに入れない場所だから楽しみにしておいで。』

普段は関西弁を話す父だが、“楽しみにしておいで”とまるで絵本に出てくるようなマイホーム・パパな感じが、メールならではの情緒でちょっぴり面映い。

また私の勤務先でアメリカンチェリーの社内販売があったので、お見舞いに持って行こうかと思い、食べられるかどうか訊いてみた。

『アメリカンチェリーは食べられそう？』

『今は胃袋にチューブ突っ込んで滞留物を排出中につき絶食しています。ありがとね。』

私は結婚して、実家から徒歩3分のところに住んでいるが、この1年の入退院に関し、理由や病状の詳細などを特別知ってはいなかった。だから、このメールを見て今回の入院は消化器系をどうにかこうにかしているのだろうか、というイメージを持つくらいだった。

“せっかく持って行こうとした”というところを父は汲み取ったのだろう。

『お父さん以外の人はチェリー好きだし食べられると思うよ』

と続き、母に届けに行く、という私の返信に対して、

『それはありがとうね。私も食べたい。』

少し甘えるというか、今までの父娘の付き合いでは見られなかった弱音を吐いた。私もちょっと辛くなって、

『大丈夫大丈夫。また販売あるよ。あとアップルマンゴーの販売もあったし。いつでも買えるから今度ね～。』

とわざと明るく返信した。

『フルーツは今一番抵抗なく食べられます。また頼みます。』

その夜、早速父からメールが届いた。

『今お母さんから連絡ありチェリーとお茶戴いたそうでありがとう。チェリーは今回間に合わなかったけどお茶は雁がねで大好物、お母さんもそう。ありがとう。』

『いいえ～。うちでは夏に熱いお茶飲まないからね。ふうふうして飲んでね。』

『はいはい、ありがとう』

この頃から、かなり頻繁にメールのやりとりをするようになった。私は、ほぼ毎日、仕事の昼休みになると『元気～？』と送った。文面では随分と元気そうなので、きっと暇を持て余しているのではないか、と思ったからだ。“元気？”という問いに、それを否定する内容の返信や、あるいは返信が無いということを恐れた。がん患者であっても、とにかく父が父であることの確認をしたかったのだ。そして、父と繋がっていたかった。

8月に入り、高校野球が始まった。父も私も大の高校野球ファンである。こちらが仕事中心であっても、気にすることなく『大阪桐蔭逆転サヨナラ勝ち！』との報告。実況メールが次々と届くようになった。

高校野球は終わったが、まだまだ暑い8月20日、いつもどおりのお昼のメール。またしても『調子はどう？』という私の問いかけに、

『良いよ！今日からかき氷、アイスクリーム類解禁になった。これで少しカロリーが口から入るようになった。』

『高脂肪のアイスいっぱい食べてね。』

『ありがとう。取り敢えず病室（病院、の誤り）の売店で入手できる御影アイスクリームをまとめ買いしてもらった。』

『良かった良かった。じゃあ逆に食べ過ぎてお腹こわさんように。』

『それに血糖値が溢れないように！了解です。』

8月22日金曜日のお昼のメール。母は週何回かのパートに行きながらも、毎日父の病室に通っていた。私は休みの土、日曜日のどちらかは必ず父のそばにしているようにしていた。だから、翌日の土曜日には父が笑うくらいたくさんアイスクリームを買って行ってやろうと思ったのだ。ただし、病室の冷凍庫は小さい。

『冷凍庫はもうアイスクリームでいっぱい？また徳用ファミリーパックなんて持っていったら入れるところ無い？』

『アイスクリームはしつこいのが分かったのでいまはあっさり系みぞれにしています。現在在庫は1個です。』

『みぞれなら抹茶やらクリームやら何でもOK？』

『みぞれと言うのは透明のシロップをかけたものだけを言います。あとはかき氷のメニューとして、抹茶なら抹茶、赤はイチゴ、黄色はレモン、とかけたものを言います。それで貴女はそのみぞれを買ってきてくれるのですか？』

『だって、本当はアイスクリームの小さなカップ6個入りとか持って行くつもりだったんだけど、ミズレだけっていうからさあ。いいよ、ミズレ買ってあげるよ～』

『色々言っておめんね。何しろ暇なもんでね。いつ来てくれるのん？』

『土曜日か日曜日』

『そりゃそうやわな。楽しみにしています。おおきに！』

メールのやりとりで気づかれたように、私は“みぞれ”というのは、単にかき氷をカッ

プに詰めたものだと誤解していたのだ。それに対して父は揚げ足を取るかのようにいちいちと“みぞれ”なるものを説明したうえで、ちょっと度が過ぎたかと謝ってみたり、私が見舞う日を素直に楽しみだと伝えてきたり。病に罹ってから見られた父の一面だった。

しかし、その日の夕方 4 時を回った頃、母から『できるだけ早く病院に来て欲しい』というメールが届いた。事情がよく分からず、定時の 5 時 15 分を 30 分以上も過ぎてから私はやっと事務所を後にし、大阪の雑踏を駆け抜けた。緊急手術になったらしい。妹と夫に同じ内容のメールを同時にやり取りしながら、また母とももっと詳細を知るためにメールを交わした。じっとしていられなくて、母、妹、夫、そして職場の親しい同僚という、4 人を相手に忙しくメールをやり取りした。

結局、父のがん細胞が腸を破り、耐え切れない痛みだったために父本人が希望した手術だった。手術中に最悪のこともある、と説明を受け、また今晚がヤマです、とも言われた。一方で、今後は延命措置はしない、という家族の決断もした。

ところがどっこい、父は見事に復活したのだった。

術後、父の身体には新たに 5 本の管が繋がれた。鼻から 1 本、左右両方の脇腹から、2 本ずつ。それに人工肛門。

「手術をしたら人工肛門になるなんて聞いてなかったなあ。」

と独り言のように呟いたことが印象的だった。あの夜の緊急手術はそれどころではなかったのだろう。ともかく胃のすぐ下あたりから、体内の物は全て管から排出されるようになったのだ。

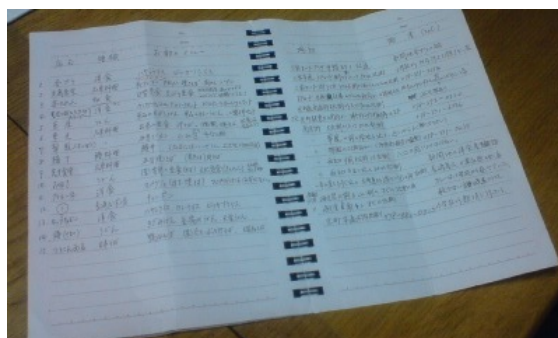
土曜日の午後、私が見舞いに行くと、ベッドの足元にある机の上にクリアフォルダーが置いてあり、その中に書類のような物が入っている。母が、

「これ、見せたっけ？」

とニタニタしながら 1 枚手渡してきた。見ると、B5 サイズでノート見開き 2 ページに渡り、“店名”“種類”“お勧めメニュー”“場所”“備考(Tel)”とあり、15 の飲食店の情報が母の字で書かれていた。よく見ると、ところどころに父の四角い、震えた文字も添えられていた。美味しいところリストか、父のやりそうなことだ、と半ば呆れ気味に「なに、これ？」と訊くと、「お父さんが、30 年通い上げた美味しくてリーズナブルなランチのリストだよー。」と、父は嬉しそうに答えた。

15 軒のうち、私もよく知っているところもあり、また初めて知った店名もあった。神戸の元町、旧居留地で働いている父らしく、南京町、元町商店街、三宮センター街の西側に集中していた。中華あり、洋食あり、うどんあり。まさにサラリーマンの昼食にふさわしいメニューが並んでいた。或いは、“小学校から 50 年行って飽きない店”という備考もあった。なんだかんだと美味しい店、自分の嗜好に合う店を見つけて外食を好むのは祖父もそうであった。その影響はきっと大きい。

父の個室には、ガーゼの交換などで一日に何度も看護師が出入りをする。その中で、お



となしく控えめな看護師に、父は出身地を尋ねたらしい。するとその看護師は兵庫県の北のほうだと答えた。せっかく神戸で働いているのだから、いろいろ美味しいお店に行っているのだろう、と話しかけたが、彼女は神戸のことはあまり詳しくないのだと言った。そこで、父は自分が自信を持って紹介できる飲食店を色々と思い起こし、きちんとリストを作ってやろうと考えた。いつか退院したら、パソコンを使って。しかし、それを実現する前に、毎日四六時中付き添っている母が暇を持て余し、父に店の情報を言わせて、さっさとノートにまとめてしまった。そして、試しにコピーを取って、例の看護師に渡したところ、今まで大して言葉を交わさなかった彼女が、このリストをきっかけに色々と話しかけてくれるようになり、随分と親しく、また表情が明るくなったのだそうだ。

その後、部屋に来る看護師一人一人に、
「このリスト、持ってる？渡したっけ？」

と、上機嫌に話しかけ、また見舞い客にもどんどん振る舞った。母はもっと見やすいように拡大したものを、“増刷！”と言ってコピーした。今どきのグルメ志向も手伝って、皆嬉しそうに眺め、“ここには以前行ったことがある”“これは雑誌に載っていました”“この店はこないだテレビに出ていた”などと、何かと父に声をかけてくれるようになり、会話が弾んでいた。

ある時、看護師長がそっと入ってきて、
「私にも、例のリスト、いただけます？」

とお願いされた。最初に例のおとなしくて若い看護師に何枚か渡したようだが、なかなか師長にまでは届かなかっただけで、そのうちに随分とこのリストが盛り上がり、いよいよ師長本人がもらいに来たのだった。

父はいつも顔色がよく、リストをさかなに見舞い客よりもよくしゃべった。そしてしつこくも、食べられないクセに料理番組やらグルメ情報番組を真剣に見ては、香りやダシとして味わえるものを一生懸命考え、

「おい、松茸の土瓶蒸しもええなあ。柚子をきゅっと搾ってなあ。」

なんてうっとりとして呟いた。

8月22日の緊急手術の時に覚悟を迫られた私たちには嬉しい誤算で、父は1週間以上も平気で過ごしていた。痛みを取る（しか、できないのだが）を最優先してもらったため、本人にとっては快方に向かっていると信じていたのだろう。そろそろ抗がん剤治療が再開されるんじゃないかな、と言ったり、自宅に戻ってから母がどのようにガーゼを交換すればいいのか、一生懸命看護師に尋ねてみたりして、私たちの胸を締めつけた。

その後、大量の下血があった。微熱や血圧が下がる傾向も見られた。家族と会話ができるように、と配慮されたモルヒネが与えられた。それでも、痛がったり、だるがったりするようになった。週末に付き添った際、ガーゼ交換と身体を拭いてもらう作業に立ち会った。看護師は手際よく進めていたが、身体を横に向けるのに、父自身の力ではもう難しくなっていたため、私も思わず手を貸した。渾身の力をふりしぼって、ベッドの柵をつかみ、看護師に支えられ、父はなんとか横を向いた。私は初めて父の背中を蒸しタオルで拭いてやった。腰骨が皮膚から突き上げ、本当に骨と皮だけの身体になっていた。

手術から2週間経過した。それまでも毎日毎日、昼休みのメールは続いていた。ベッドの柵に繋がれたケータイを、上体を振った体勢で操作していたため、父はひどい肩こりを

訴えていたらしい。私は、それをこの頃まで知らなかった。送信すれば、即座に、また結構な長文で返信が届く。妹に対してもそうだった。

9月9日の昼休みのメール。

『そんなに肩が凝るなら、メールせんかったらいいのに。。。(あっかんべーの絵文字)』
そして遂に、心から恐れていた“返信なし”という事態になった。

『今日も会社の帰りに顔見にちょっとだけ寄るね』
泣きそうになるのをぐっと堪えて、独り言のようにもう一度送った。これが私から父への、最後の送信メールとなってしまった。

9月9日以降、私と妹は、毎日会社帰りに父の病室に通うようになった。どちらかがお弁当やお惣菜を買い、病室で母と3人で夕食を取るのだ。もう30年近くも続いてきた自宅での夕食の雰囲気、私たちはそこで平然と守った。

毎日毎日、私たちは見慣れた神戸の滲む夜景の中を父に会いに行った。仕事でも、父に会いたくて会いたくて仕方が無かった。

1週間を経過し、いよいよ父とは目が合わなくなってしまった。

はあっ はあっ と口をパクパクさせる父の呼気は、もはや正常な食物を摂取している人間のものではなかった。完全に病に冒された内臓が発する臭いを帯びていた。なんだか顔だけでなく、父のからだ全体が、父の存在が、のっぺらぼうになってしまったような気がした。

9月21日。父は、静かに、本当に静かに息を引き取った。

ランチリストの第二弾を作るとも言っていた。固形物がダメなら自分でとっておきのいいダシをとるのだとも言っていた。まさに食べること、味わうことは、父の原動力だった。

ズシュッ ズズシュッ

鈍いが、なんとも気持ちのいい低い音が響いた。

9月27日。父を病院から一旦自宅へ連れて帰り、檀那寺で初七日まで済ませた。いよいよ帰省していた兄一家が愛知に向けて戻る日であった。親戚が持ちこんだ茶そばを昼食にしようと、義姉がダシを取るために鯉節を削っていたのだ。

「おそばを食べるたびに、鯉節を削るなんて、贅沢ですね。」

と義姉はもらした。そのうち5歳の甥がやってみたいと言い出し、興味深げに慎重に削りだした。そのナマリは、子どもの手で握っても、削るには難しいくらいの小ささにまでよく削られていた。もう鉛筆の削りカスほどの細かい鯉節しかできなかった。

「いまだに、おダシを取るときは緊張するのよ。」

と母は苦笑した。

父が納得するダシを取るには、まだまだ鯉節の量は足りないようだった。

風がそよともしないまだ暑い秋の日。まっすぐと立ち上がる香煙の向こう、静かで眩しい庭には、彼岸花が満開だった。